

スキルアップセミナー 乳房班

「デジタルブレストモシンセシスの運用と課題」 座長集約

小国町立病院 伊藤 真理(Ito Mari)

今年度のスキルアップセミナー乳房のテーマは「デジタルブレストモシンセシスの運用と課題」としました。デジタルブレストモシンセシスが誕生してからおよそ10年が経とうとしており、トモシンセシス機能は、診断のみならず、吸引式乳房組織生検においても利用されるようになりました。また、トモシンセシス画像から作成される合成2D画像が診断に有用であるか検討されており、トモシンセシス機能はますます活躍の場を広げていくと思われれます。昨今は、トモシンセシス搭載装置を導入する施設が増えてきておりますが、運用や精度管理の方法についての悩みも多く耳にします。この機会に、少しでも解決の糸口が見つかればと思います、トモシンセシス搭載装置の経験豊富な2施設から、北福島医療センターの齋藤久美さん、東北公済病院の川口志保さん、さらに日本放射線技術学会ブレストモシンセシス学術研究班である東北大学病院の千葉陽子さんに演者をお願いしました。

はじめに、齋藤さんからは「デジタルブレストモシンセシスの運用と使用経験」として、2台の異なるメーカーの装置を使用している経験から、それぞれの装置紹介や装置の特徴を活かした運用方法、トモシンセシスが有用であった症例を報告していただきました。メーカーそれぞれで画像の見え方が大きく異なるので、メーカーに画像処理などの調整をしてもらい、施設にあった画像の作り込みをしたエピソードはとても参考になりました。

次に、川口さんからは「Tomosynthesis機能を用いた吸引式乳房組織生検」として、検査の一連の流れや、検査環境の工夫、トモシンセシス機能でのターゲティングならではの利点や悩み、今後の課題を報告していただきました。これまでのステレオ撮影でのターゲティングは、石灰化の同定が困難なことが多かったのですが、トモシンセシス機能を使うことにより容易になったことで、検査時間の短縮と患者さんはじめ検査スタッフのストレス軽減に有効だと思われました。

最後に、千葉さんからは「デジタルブレストモシンセシスの基礎と精度管理」として、品質管理項目や方法が確立されていない日本の現状や、世界の動向、さらには IEC規格で定められた精度管理方法のうち3項目について紹介していただきました。

これからもトモシンセシス搭載装置の普及は進んでいくと思われれますので、それぞれの施設にあった運用や精度管理の方法など、情報のブラッシュアップが必要不可欠となります。今回のセッションがその一助となれば幸いです。

次回の新潟では、「精度管理できていますか?」をテーマとし、「私の施設の精度管理の工夫」とMMG入門編「SCTFについて」を企画していく予定です。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

最後に、今回の学会は会場と仮想空間を使った新たなカタチでの開催で、座長として戸惑う部分が多々あり、皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫びいたします。改めて、ご協力いただいた演者の皆様、参加者の皆様、また実行委員の関係各位に感謝申し上げます。